

平成25年11月21日

行政視察活動記録

建設経済常任委員会
委員長 多田 一明

年月日	平成25年11月13日 から 平成25年11月15日 まで
場所及び目的	奈良県森林技術センター 特產品の掘り起こしについて 滋賀県草津市 特產品の掘り起こしについて 愛知県西尾市 特產品の掘り起こしについて 愛知県常滑市 特產品の掘り起こしについて

年月日	平成25年11月13日
相手方及び目的	奈良県森林技術センター 「特產品の掘り起こしについて」 (竹材を利用したバイオマスプラスチック製品の開発について)
内容・結果等	<p>奈良県森林技術センターは昭和38年4月、林業指導所として開設され、林業に関する試験研究及び指導を行ってきた。</p> <p>現在は林業試験場と改称し、試験研究の中核施設として奈良県の林業、林産業の近代化を進めてきた。</p> <p>平成24年9月18日、竹材（竹粉）を80%含有するバイオマスプラスチックを、産業技術総合研究所、京都工芸繊維大学及びシャチハタとの共同研究により開発した。</p> <p>木粉とポリプロピレンなどの熱可塑性とを混練して得られる成形物は使われているが、木材は親水性、プラスチックは疎水性があるため成形方法が限られる課題があった。</p> <p>一方、竹は成長量が莫大で、資源として地域に豊富にありながら、ほとんど利用されていないため、西日本を中心に放置されて荒廃した竹林の面積が増大している。さぬき市においても同様の状況にある。</p> <p>このような状況の中、二百数十℃での「過熱蒸気（低温炭化）処理」を竹材に施し、再粉化して熱可塑性樹脂と混練。低温炭化により竹粉は疎水化されて80%の竹粉率であっても熱可塑性プラスチックとの相溶性が改善され、成形品の強度・性能が改善、成形品の吸水性や寸法変化の抑制、耐久性の向上などが確認された。</p> <p>この技術については、香川県産業技術センターでの押出成形実験など、技術提携しているとのことである。現在、シャチハタが竹材を利用したバイオマスプラスチックを原料として、射出成形した印肉ケースの試験販売を開始している。</p>



備 考	(参加者) 建設経済常任委員会委員 7 名、建設経済部 1 名、議会事務局 1 名、 計 9 名
-----	--

年 月 日	平成 25 年 11 月 14 日
相 手 方 及 び 目 的	<p>滋賀県草津市産業振興部農林水産課 「特産品の掘り起こしについて」 (あおばな振興事業の取り組みについて)</p>
内 容 ・ 結 果 等	<p>草津市は滋賀県の南部に位置し、江戸時代には東海道と中山道が接する宿場町として栄えた。現代においても、日本の東西を結ぶ交通の要衝となっている。こうしたことから、同市は毎年、人口が増加しており、平成 26 年 10 月には市政 60 周年を迎える。</p> <p>「あおばな」は、“つゆくさ”の変種であり、背丈は 1m まで伸びる。6 月下旬から 8 月下旬にかけて 3 ~ 4 cm ぐらいのコバルトブルーの花を咲かせるが、花は太陽に弱く昼前には凋んでしまう。</p> <p>「あおばな」栽培作業は、夏の暑い時期に一家総出で行うため、その苦労は計り知れないものがあり年々、栽培農家数、作付面積は減少しているが、「草津あおばな会」を設立して振興策に取り組んでいる。</p> <p>「あおばな」は染料加工と粉末加工の二つの用途がある。</p> <p>染色加工は青花紙（友禅染の下絵用）、粉末加工はお茶をはじめ、ソバ、ケーキ、チョコレートなど、家庭での料理活用から食用製品への活用を計画している。</p> <p>これから新しい「草津あおばな」が担う役割として、歴史、健康、世代をつなぐ体験学習により草津市の地域活性化に努めたいとのこと。</p> <p>さぬき市においては、色々な農作物を栽培しているが、それぞれ付加価値を付けて栽培する必要があると思われる。</p> <p>一例として、桑の葉の資源化などが挙げられる。</p>

	
備 考	(参加者) 建設経済常任委員会委員 7 名、建設経済部 1 名、議会事務局 1 名、 計 9 名

年 月 日	平成 25 年 11 月 14 日
相 手 方 及 び 目 的	<p>愛知県西尾市地域振興部商工観光課 「特産品の掘り起こしについて」 (地域ブランド「西尾の抹茶」の開発・販売における取り組みについて)</p>
内 容 ・ 結 果 等	<p>西尾市と周辺地域の特産である「西尾の抹茶」が、平成 21 年 2 月 20 日、特許庁の地域ブランド（地域団体商標登録制度）に認定された。茶の分野で抹茶に限定した地域ブランドとしては全国で初めてとなる。</p> <p>品質では高い評価を得ていたものの、原材料として宇治に供給されてきた。西尾茶ブランドで PR したが、知名度の低さから効果が薄く、地域団体商標を取得することで商品供給地としての自立を目指した。</p> <p>茶の栽培面積は 162ha で、生産者は 149 人、抹茶生産量では、抹茶製造業者 “あいや” をはじめ多くの業者があることから全国一の生産地となっている。</p> <p>ブランド効果として、茶業関係者自らが生産する茶葉や商品に対して誇りと責任を持ち、抹茶関連イベントにも積極的に参画するようになった。また、他産地との差別化を図った PR をを行い、新商品の開発にも取り組むようになった。さらに、売り上げも好調で、地域経済の活性化にも寄与している。</p> <p>振興策として、市民大茶会、抹茶の臼挽き体験等のイベント、市内中学生による茶摘み、勤労体験学習等を通じ、子供たちは幼い頃から抹茶に親しんでいる。</p> <p>また、観光物産展への参加、ゆるキャラ「ま～ちゃ」を作成しての各種イベントでの PR 活動などに取り組んでいる。</p> <p>平成 21 年 11 月の道の駅開業に伴う新商品の開発を行っている。主なものとして、和洋菓子、茶そば、サイダー、甘酒、ビールがある。また、ブランドマーク入りの商品としては森永アイスクリーム、ダイドードリンコ飲料などである。</p> <p>今後の課題としては、地域ブランド認定を受けた後の PR 活動、新商品の開発であるが、特に、長い歴史の中で培われた「抹茶＝宇治」の “常識” の払拭である。また、後発地との競合や後継者対策については茶栽培面積が横ばいか微減であるが、茶業界では後継者が確保されており、他の分野のように深刻な状況にはない。</p>

備 考	(参加者) 建設経済常任委員会委員 7 名、建設経済部 1 名、議会事務局 1 名、 計 9 名

年 月 日	平成 2 5 年 1 1 月 1 5 日
相 手 方 及 び 目 的	<p>愛知県常滑市（中部国際空港） 「特産品の掘り起こしについて」 （天然海藻アカモクの高付加価値商品の開発・販売における取り組みについて）</p>
内 容 ・ 結 果 等	<p>アカモクとはホンダワラの一種で1年藻。日本各地沿岸に分布しており、食習慣は東北、九州のごく一部の地域のみである。強い粘りと高い風味、シャキシャキした食感で豊富なミネラルを含んだ海藻である。</p> <p>常滑市産のアカモクはカルシウム、鉄分、食物繊維等を多く含み栄養豊富である。また、抗がん作用、抗アレルギー作用や免疫力向上作用があり身体にもよいとされている。</p> <p>中部国際空港の建設に当たり、海域環境に配慮した空港建設、また空港島の護岸に自生するアカモクを資源として活用することとした。</p> <p>アカモクは冬から春にかけて成長して7メートルほどに育つ。その後、5～6月頃には枯れて流れ藻になる。流れ藻は海岸に漂着したり、漁船に絡み付くなど、漁業者からは厄介者扱いされてきた。</p> <p>ゴミとしてしか扱わなかったアカモクを食用海藻としての安全性と成分分析、資源化に向けた基礎的検討を加え、平成21年に空港職員有志と地元漁業関係者でともに研究を重ねて商品化に成功した。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○未活用資源の食材活用による新地産品の創出・普及 ○アカモク商品化に関わる生産者に対し、6次産業化への支援 ○栄養豊かな新食材としての提供をはじめ、食育による地域への貢献 <p>の3つを目的としたプロジェクトの実施を経て、現在は学校や病院の給食食材としての提供をはじめ、空港飲食店や地域量販店での販売から食料品の原材料としての出荷まで広く活用されるようになった。</p> <p>売上高は2010年が700万円、2011年1500万円、2012年1000万円、2013年は気候変動にため未出荷、2014年（中間期）800万円となっている。</p> <p>未利用資源の現況としては3年間の活動成果が表れ始め、農林水産省補助、6次産業事業に合致、経産省中小企業地域資源活用法の地域資源に登録され、これまで水産資源として扱われず無価値で、ゴミ（厄介者）的位置付けであった「アカモク」が、名実ともに地域資源として認知された。</p> <p>さぬき市の海岸には、ワカメ、イギス、天草等が自生しており、ごく一部の者の利用していない。郷土料理として付加価値を付けて</p>

いくことも必要と思われる。



備 考 (参加者) 建設経済常任委員会委員 7 名、建設経済部 1 名、議会事務局 1 名、計 9 名